



地下鉄浅草線の雑踏を抜け出して花川戸、その先の言問通りをわたると、めだつて人影が少なくなつた。待乳山聖天さまの裏手で道が二手に分かれている。左に入ると、すぐ前が「いまどぼし」。一九二〇年代に流行したアール・デコ調の橋桁に、シャレたガラスの明かりがのつている。そんな粋なつくりからも、いまは埋め立てられて跡かたもないが、この川が、ただの川でなかったことがうかがわれる。

山谷堀さんやぼりといって、吉原通いの小舟がゆるゆると通っていた。聖天橋、地方橋じかたなどを過ぎると、日本堤橋で見返り柳のあるところ。英一蝶作はなぶさとつたわる戯作にいわく、「待乳しづんで、梢のりこむ今戸橋／土手の相

傘片身かはりの夕時雨／君をおもへはあはぬむかしの細布」。意味はよくわからないが、情緒テンメンとした末練すえだころは察しられる。

上流は王子に流れる音無川おとなしで、根岸・三ノ輪・日本堤のわきを下り、今戸橋の先で隅田川に合流した。懐に余裕のある風流人コースであるとともに、荷船の往きかいする物流の道でもあった。

現在は都立山谷堀公園といって、ナニはいけない、コレはするなといった標識がやたらに立ててある。帯のように細長いだけで子供がよろこぶはずはないから、住所不定の人が居つくの警戒してのことのようだ。

まずは今戸神社にやってきた。今戸焼の里の守り神

である。

招き猫発祥の地 沖田総司終焉の地

にこやかに右手を上げた猫の下に、新撰組きつての剣の使い手がいる。説明によると、胸を病んだ青年剣士は当地の医者の手当てを受けていたが、この地で没したという。

若い女性が二人、三人とつれだつてやってくる。招き猫でも沖田総司でもなく、当神社がえんむすびの神として知られているせいのようなのだ。お参りしてからクジを引くのがエチケットのようで、「良縁近」を引きあてた娘がけたたましく歓声を上げた。右にケータイ、左にクジというところが、いかにも現代である。口をすすぐつもりで、ひしゃくを取って気づいたが、「禁犬に拘使用」と墨書した板が柱に打ちつけてある。口はやめて手にかけるだけにした。

今戸焼がいつごろ始まったのか、正確なことはわからない。徳川家康が江戸を開いたときに三河の陶工が移ってきたというが、たぶんハクをつけるための伝説だろう。瓦や火鉢、小物では招き猫、狐、豚の形の蚊やりなどが中心だった。「江戸名所図会」の今戸焼には、隅田川紀行をした俳人が添書をつけている。

(土をこね瓦つくりならべてほしければ)

やかぬまは露やいとほむ下瓦

参道前の狛犬の台座に「當町火鉢屋中」「焙烙屋中」「玉置屋中」として総計三十あまりの名前が刻まれている。かつては今戸一帯に小さな窯元が軒を並べていたわけだ。焼き物には土と燃料が不可欠で、瓦をはじめとする土製品は重くて運ぶのが厄介である。その点今戸は隅田川岸と山谷堀を控えて、地の利を得ていたし、それに安手の人形類は吉原婦りが子供のみやげに買っていく。

今戸焼発祥之碑

立派な御影石の背中に、平成十二年(二〇〇〇)の日付と、二つの窯元がしるされている。そのころにはまだ窯の火が燃えていたのだろうか。

店番の人にたずねたが、どうも要領を得ない。招き猫は人気があるから作る人がいるが、「仕入れ先は遠方」だという。「滋賀方面」だとかで、業者がもってくるだけだから、それ以上はわからない。「禁犬に拘使用」を打ちつけたのは、この方のように、あまりしつこくたずねると、いずれ売店に「禁今戸焼質問」があらわれるかもしれない。